

ふるさと自然、今

北網圏北見文化センター 学芸員

柳谷 卓彦



天然記念物のオジロワシ

はじめに

このほどの自治体合併に伴い新しく制定された北見市民憲章の第一条には「自然を愛し」と謳われております。新・北見市に住む私たちは、標高1,758m、高山植物が咲き乱れる武華岳山頂から、オホーツク海に面し約700haにおよぶワッカ原生花園まで、知床世界自然遺産に匹敵する豊かな自然と共に生きていくことになりました。

豊かな自然の象徴

皆様の愛する「ふるさと北見」では、北見駅からたった35kmのところに、翼を広げると300にもなる天然記念物のオジロワシが住み、毎年子育てに成功しています。このような大型の猛禽類が暮らしている都市は世界的にも例がなく、北見人の誇りです。さらに、合併後の調査によって、海岸線にも数箇所の営巣地があることがわかってきました。

これが、自然と人類の新たな関係に向けていかに重大なことであるかは、我が国が平成14年3月27日に「地球環

境保全に関する関係閣僚会議」で決定した「生物多様性国家戦略」から読み取ることができます。

オジロワシを含む猛禽類が関係する部分を抜粋すると、「国土空間における生物多様性のブランドデザイン」の中に、目指すべき将来像のイメージとして「奥山のみならず里地里山、都市にも巨木が点在し、大都市にも大規模な森があり、猛禽類が悠々と空を舞っている。」と述べられています。

我がまちは、国家の目指す理想のモデル都市としての輪郭を備えていると言えるのです。

また、早春の瞬くような時のなかで花開き、春の喜びを伝える「春の妖精」と呼ばれる花たち。中でも大群落を作る、留辺蘂町富士見の7ヘクタールのミズバショウ、温根湯温泉の北海道指定天然記念物のエゾムラサキツツジ、端野町には国内分布の東限に位置するカタクリがあり、市指定文化財のカタクリ及び周囲の北方落葉広葉樹林に含まれ保護されています。

その他、絶滅危惧種に指定され北見の名の付くキタミフクジュソウ（キンポウゲ科）、クリンソウ（サクラソウ科）などの植物や日本にだけに住むニホンザリガニ（アメリカザリガニ科）、春の女神と呼ばれるヒメギフチョウ（アゲハチョウ科）、オオイチモンジ（タテハチョウ科）などの動物の生息も合わせて確認されました。中でもオ

オイチモンジ（タテハチョウ科）は、長野県では上高地などに住み、天然記念物に指定されている大きさは8cmぐらいの、黒い色調に白線は名前の通り真一文字に描かれた大型のタテハチョウです。ドイツの作家シュナックは、美しいその羽に北極光（オーロラ）の飾りがあると述べているほど美しい蝶です。彼らと共に住むことは、ヨーロッパや高原の避暑地に家があるのと同じことなのです。

変わる豊かな自然

しかし、そんな豊かな北見市の自然に今、異変が起こっています。それはエイリアン・スピーシーズと呼ばれる外来生物たちの侵入が目立つようになってきたことです。

なかでも、昨年9月環境省の特定外来生物に指定されたセイヨウオオマルハナバチが定着すると、エゾの名の付く在来マルハナバチの生存を脅かし、さらに「盗蜜」行動により在来マルハナバチと数千年数万年のときをかけて作り上げてきた、花とマルハナバチによって作られてきた生命の循環システムを破壊しています。植生など地域固有の自然への影響は避けられません。

先日ワッカ地区植生調査の際、春植物のエゾエンゴサクや初夏を代表するセンダイハギに無数の「盗蜜」によ



ミヤマカラスアゲハ



オオマルハナバチ

る穴だらけの姿を常呂自治区の皆さんと確認してきました。また置き換わりも進み、エゾの名の付くエゾオオマルハナバチなどの在来種は10分の1ほどしか確認できず風前のともし火でした。

セイヨウタンポポが咲き乱れ、セイヨウオオマルハナバチが我が物顔で飛び交い、エゾタンポポやエゾオオマルハナバチは風前のともし火、そこは蝦夷地ではなく異国になったかのようにした。

さらに帰化植物や花壇や畑から逃げ出した逸出植物など外来植物は増え続け、常呂川流域に自生している1305種の植物の内、約4分の1の26%の21種が確認されました。中でも特定外来生物のオオハンゴンソウや要注意外来種のハリエンジュ(ニセアカシア)などが繁茂し、長い地球の歴史が築いてきた北見らしい景観や原風景を次々と変えようとしています。

このままでよいのでしょうか？北見らしさや原風景を失って何が「ふるさと」なのでしょう？「国敗れて山河あり」。将来世代に残せるものは「ふるさとの健康で豊かな誇り高き山河」ではないのでしょうか？山河の大切さは「うさぎ追しかの山くこぶな釣りし」とはじまる文部省歌「ふるさと」でも大切な「ふるさと観」として第一番目に詠われています。

おわりに

私は、「常呂川流域の自然と人の営み」をテーマに当地方の自然の住民基本台帳を作り、虫をはじめ全ての生き物に生きる権利、「生存権」「生命権」があると子供たちに教えてきました。外来生物であつても排除することには心が痛みます。しかし、外来生物等に脅かされた「傷ついたふるさとの自然」を将来世代や東京北見会をはじめとするふるさと想う全ての人々に残すことはできません。美味しく、安くて、安全なトマトを作るために引き起こしたセイヨウオオマルハナバチの問題、一〇〇〇年後の北見市民にどのように写り、評価されるのでしょうか。

豊かで健康な地域の自然(生物多様性)を守り、未来へ引き継ぐ取り組みは、「地球憲章」の前文からも読み取れる「持続可能な地域(人類)社会の構築」という人類共通の利益に繋がる活動です。

自然界は子供たちに人気の「虫キング」のように、ともすると戦いに明け暮れ、弱肉強食、自然淘汰など競争ばかりが支配しているかのように写ります。しかし最後に到達するのは生命やエネルギーがしなやかに循環する調和とバランスが生み出す共生の世界です。

北見のまちが、昆虫学者の塚本圭一先生が「糞虫たちの博物誌」中で述べている豊かな野性と人間が共生する「知の風土」の復活を目指し、日本が世界に誇る心豊かな「理想の共生」を目指す子供たちの笑顔が絶えない、まちになることを夢見ています。東京にいても夢を語り共に楽しんでいただければ幸いです。

末筆ながら東京北見会の30年の歩みお喜び申し上げます。また記念すべき30年記念誌に執筆させていただく機会を作っていただいた井戸様はじめ会員の皆様方に感謝申し上げます。



ヒメギクチョウ